

## 生かされて生きる

丸山 勉

### [聖書] ガラテヤの信徒への手紙 2章 11～21 節

さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしましたからです。そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。しかし、わたしは、彼らが福音の真理にのっとってまっすぐ歩いていないのを見たとき、皆の前でケファに向かってこう言いました。「あなたはユダヤ人でありながら、ユダヤ人らしい生き方をしないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユダヤ人のように生活することを強要するのですか。」わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義とさせていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない。もし自分で打ち壊したものを再び建てるのであれば、わたしは自分が違犯者であると証明することになります。わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

### [序] 言葉と人格

この間の金曜日は、憲法記念日の祝日でした。私は川越で一本の映画を見てきました。新しい日本映画ですが、映画のタイトルは、『誰がために憲法はある』といいます。井上淳一という方が監督で、上映後、この監督と、制作に関わった馬奈木さんという弁護士の方のトークショーもあって、私はとても考えさせられました。(監督の思い、チラシから少し読む)。

この映画の面白いところは、日本国憲法に「人格」を持たせて語らせているところなのです。「憲法くん」という名前を持って、もう 70 才になった私がどのようにして生まれてきたのか、を語るのです。それは、どんなに悲惨な過去の戦争の惨禍

を繰り返すまいとした人々の思いの結晶が自分を生んでくれたのか、ということ。ところが最近、私はもう変わった方が良くとリストラされそうになっているのですと語り、「私の魂は、この憲法の前文に記されているのです」と言って、その憲法前文を暗誦し始めるのです。その朗読が、映画の頭の部分と、途中の、特に広島での取材ドキュメンタリーを挟んで、最後にもう一度暗誦するのです。それがとても印象的でした。「憲法くん」というのは、もとは松元ヒロというコメディアンの方が20年以上舞台でずっと上演しているもの、ということですが、この映画では、87才になる女優の渡辺美佐子さんが演じていました。彼女は、実際に初恋の人を広島原爆で失っているのです。

(憲法前文少し読む)。この「日本国憲法前文」というのは、名文かも知れませんが、人間が綴った言葉に過ぎない、と言えるのかも知れません。けれども、それは単なる言葉ではない、ひとは理想的な言葉と言うかも知れないけれども、そこには、それを生み出させた人々の痛みや、決意や、或いは、祈りと言っても良い思いがあるのだな、と思ったのです。「憲法くん」が自分の生い立ちや現在の思いを語ることによって、言葉というものが、歩き出すのです。人格性を持つのです。——もしかしたら、私たちは言葉というものを余りに軽くとらえてしまっていることはないだろうか——どんな言葉に対してもです——そのように思われました。そして、それは特に「聖書」の言葉を、きちんと人格性のある言葉として聴いているか、捉えているか、そのことを問われた気が致しました。

### [1] 「信仰義認」の発見

先週から「ガラテヤの信徒への手紙」を読んでいます。書き手は使徒パウロです。ガラテヤの信徒への手紙(いわゆるガラテヤ書)の大きなテーマは、「信仰義認」と呼ばれるものです。「信仰義認」。つまり、人の救いというものは、自らの行いや律法遵守によるものでなく、そのようなわざによるのではなくて、イエス・キリストにおいて示された神様のご愛を信じる(受け入れる)その信仰によるものなのだ、というものです。

ご一緒に16節を読んで見たいと思います。「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義とさせていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。」

この「義とされる」というのは、元来は法律上の用語です。「無罪と認められる、適格と認められる」という意味があります。そしてそれは罪をゆるされる、という意味にとどまらず、神様と交わる資格を与えられるという積極的な意味を持ちます。

私たちは何となく「信仰義認、大事よね」とあっさり思っただけですが、この真理に至ったということは、実はコペルニクス的な大転換なのです。天動説から地動説が発見され、正に立ち位置がひっくり返ったように、神様に受け

入れて頂く、その根拠がひっくり返った事柄なのです。

キリスト以前、ユダヤ人たちは、モーセに与えられた神の言葉すなわち律法を口ずさみ、遵守することが神様との関係で絶対的なことでした。その言葉は、神様の愛そのものでもあったので、それが与えられていること自体は、とても素晴らしいことなのです。旧約聖書は、クリスチャンにとっても重要です。けれども、人間は悲しいかな、その掟、律法の一つひとつを「形骸化」してしまうようになるのです。つまり「神様の愛ありき」ではなく、「律法ありき」になってしまう。その律法を守らなければ神様に受け入れて頂けない、もっといえばそれは神様を知らない異邦人たちと同じように交わりの外に置かれてしまう、という理解になってしまいました。しかし、律法(その数は613あると言われます)を守ろうと真剣であればあるほど、実行し得ない自分、なり得ない自分を発見するのです。それはとても苦しいことだと思います。実は、この書を書いたパウロはそれに本当に苦しんだ人なのです。そして彼は言いました。「**律法の実行によっては、だれ一人として義とされない**」のだと。

パウロがそのように言い得たのは何故かと言え、**彼がイエス・キリストの恵みを知った、いえ、体験したから**です。ご存知のように、彼はイエス・キリストを主と信じたキリスト者たちを迫害していた張本人でした。「息を弾ませながら」キリスト者たちを壊滅しようとしていた人物なのです。何がそう行動させたのでしょうか？——彼は羨ましかったのだと思います。彼らの**喜び**が。彼らの**自由**が。或いはそこから生まれる**讚美**が。まぶしくて仕様がなかったのだと思います。それは、「律法については落ち度がない」とまで言うユダヤ教のエリート青年であった彼にとって、自分の中にはない喜びと自由に映っていたに相違ありません。

その彼が、正にキリスト者たちを迫害しようとして道を急ぐその途上で、彼は光を浴びて地に倒され、**復活のイエス・キリストの声**を聴いたのです。先週もお話しましたけれども**使徒言行録9章**の出来事です。「わたしはあなたが迫害している**イエス**である」と、生けるイエス様につかまえられて、彼は三日間盲目になりました。これが彼の**新生の始まり**です。今までの**延長線上**ではない、**全く新しいスタートライン**に立たされたのです。そして再び目が開けた彼は初めて知ったのです。「**救いというのは、己れの中からは出て来ないのだ**。律法を頑張って行ったところで、それは自分を尊大にさせるか、自分を絶望させるか、そのどちらかだ。ひとが義とされるのは、己れのわざによるのではない、この私自身を捕らえて下さるお方＝**イエスを信じる**というそのことだけなのだ！」と、**彼は、イエス様の方から捕えられることによって知った**のです。

## [2] 真に神様に生きるために

ですから、彼はこのガラテヤ書2章11節以下で、あの直弟子であるケファすなわちペトロの態度のことを厳しく批判していますけれども、それはケファが信仰義認に相応しくない態度を皆の前で現したからです。こう書いています。

「さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしたからです。」

キリストの救いを前にする時、もはやユダヤ人であろうが異邦人であろうが、何ら隔てもありません。ただ主の恵みのみのよって救われるのだと教会は確信するに至りました。この2章の初めの方では、異邦人伝道を進めていたパウロたちがエルサレムに上り、そこで、ユダヤ人キリスト者のリーダーたちと出会い、お互いの宣教の働きを確認し、認め合う画期的な会合を持ったのです。7、8節をお読みします。

「彼らは、ペトロには割礼を受けた人々に対する福音が任されたように、わたしには割礼を受けていない人々に対する福音が任されていることを知りました。割礼を受けた人々に対する使徒としての任務のためにペトロに働きかけた方は、異邦人に対する使徒としての任務のためにわたしにも働きかけられたのです。」

使徒たちの働きの大きな転機です。しかし、問題はこの後に起こりました。これはまあ、ペトロの弱さが出てしまった出来事だったと言って良いと思いますけれども、ペトロが、既にユダヤ人も異邦人も分け隔てなく会食するその教会の交わりをしていたにも拘らず、未だ割礼を重んじているユダヤ人のリーダーたちがやってくると、彼らを意識して尻込みし、会食から身を引こうとしたのです。これは一見小さなことのようにですが、パウロにとっては、「福音の真理に則って、まっすぐ歩」いていない(2:14)由々しき事柄に思えてなりませんでした。これはパウロにとって譲れないことでした。何故なら、信仰とは、律法主義を乗り越えたものであるはずだからです。ペトロ、あなたの信仰はどこにあるのか。そんな目先のことで右往左往して、ブレていいのか？ あなたらしくもないではないか。あなたも直接私と同じように、復活のキリストに相見えたのではなかったのか？ これからは、教会はユダヤ人も異邦人も交じり合って生きていく時代だ。そんな、いちいち他者(ひと)を恐れていたら教会が成り立って行かなくなるのではないかと、パウロは言いたかったと思います。

19節でパウロは、自分は、律法に対しては、律法によって死んだ者だ、と語っています。何のためにかと言うと、パウロは「神に生きるために」と言い切ります。ここはとても心に留まる部分です。彼は、神様に生かされる喜びを本当に与えられた。その喜びに生きるということと、古い自分が「死ぬ」ということは一つのことなのだというのです。何故ならば、単純なことですが、私たちの人生というのは、一つのいのちを生きる以外に無いのです。自己保身の生き方と、神様の命を頂く生き方とは、本当は両立しないのです。「あなたは、神と富とに兼ね仕えることは出来ない」という厳しい言葉がありますけれども、よく考えたら、本当にそうではないでしょうか？ あ

あなたは「誰を」神様にしていますか？「神ならぬもの」を神様にしてこの時のペトロのように不自由になっていませんか、ということがいつも問われるのだと思います。

「律法」そのものは神様ではありません。それは、言葉です。掟です。それ自体が一人歩きすると、それはひとを裁く言葉となったり、不自由を与える言葉となるのです。「律法主義」に陥るのです。言葉の「与え主」がいつも大事なのです。

先ほど、日本国憲法が「憲法くん」として語られた時に、そこに多くの者たちの痛み、悲しみ、祈りが感じられたと申しましたけれども、「聖書」こそ、そのような、正に神様の命、イエス様の命が注がれたことばではないでしょうか！

### [結] キリストと共に

パウロはここで古い自分に死ぬ、ということを述べているのですけれども、注意したいことがあると思います。それは、例えば「武士道とは死ぬことと見つけたり」などと言われますが、そのような覚悟をパウロはここで言っている訳ではありません。「美学」ではないのです。そうではなく、パウロはこう言っています。

「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」

ここで重要なのは、「キリストと共に」という告白です。「私」という人間はどこまでも頑固で、自分にしがみつく存在なのです。自分では自分に死ねないのです。しかし、キリストが私の代わりに死んで下さった！いいえ、あの十字架は、私の死でもあったのだ、私をあのゴルゴタに連れて行って下さったのだ、そうであれば、イエス様の復活は私の復活でもあるのだ。何と幸いなことだろう！「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」と今言える私とされている！「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」

ここで言われているのは、私の命の確かさです。私は生かされている、ゆるされている。だから安心して生きて行ける。どんな試練がやってきても、私の「命」となって下さる方が、私をしっかり掴まえていてくれる。このお方と私たちもしっかりとつながって、讚美の捧げものをして人生を生きてゆきたいと思います。

お祈りをお捧げ致します。